

馬鈴薯の二〇%くらいがでん粉化しているのだ。

その後収容所では、ものすごくシラミが発生し、体力は減退し、栄養失調者が出てきた。医者も少なく薬もないのだ。下痢患者などは消し炭を粉にして飲ませるなどの最低であった。アメバー赤痢や回帰熱等が流行し、千五百人の収容所で多い日は十五人も死亡したこともあった。ソ連もこれには困った。町へ入浴しに連れていったり、衣類の熱菌消毒をやったり、躍起になって防除に専念した。その結果シラミは急に減少したが、困ったことは厳冬の死亡者の埋葬である。死亡者は小学校の教室大のところへ素っ裸で放置し、墓穴のできるのを待って、六人ばかりずつそこに積んでソ連人が墓所まで運ぶのである。墓穴は我々日本人が掘るのだ。四メートルから八メートルくらいの穴を昼夜二交替で二か所ずつ掘るのだが、地下四尺からも凍っていてはなかなか掘れない。昼組は帰りに枯れ木を山に積み火をつけて帰り、翌日にはそこをまた掘る。夜組はまた帰るときに火をつけて帰るのだ。ある日、死亡者が運ばれて来たので、もしや知っている人でも来

たかと思ひ行つてみたら、自分と同年兵の千葉勝也君ではないか。はっと驚いてそばへ寄つて見たら、まぎれもない千葉君だ。それが何と、右手に黒パンを持たままではないか。朝の食事中に死んだと聞いていたが、何とだれもがパンも取らずに死体の安置室へ送ったのか。涙がとめどなく流れた。

無 題

新潟県 室 橋 正 一

ソ満国境で戦闘配置にしていた私の所属部隊が、ソ連軍の命令で国境から延吉市に向かって出発したのは八月十六日だ。延吉市までの道中には日ソ両軍の累々たる死体が折り重なっていて、その悪臭は鼻を突き目にしみ込んで、嘔吐感で神経が錯乱する。とてもこの世の情景とは思えない。豆満江の支流には、人馬の死体が無数に流れていて、水面は人の油でヘドロ状だった。

日本軍が逃げるときに橋梁を爆破したので、自分たちはドロドロの水の中に首までつかって河を渡らねばならなかった。

軍衣に付着した黄色い汚物は、異様な悪臭を放ち飯はのどを通らない。兵隊は昼飯抜きで歩き続けた。路傍の草むらや畑は、砲弾でえぐり取られて、赤土が露出していた。

すべての生物が死滅した世界だ、異常に繁殖したハエだけがうなりを上げて飛びかっている。何もかもむなしい、生と死の空間だ。

戦死した兵士のはかない命を見つめて瞑想にふけり、ただトボトボと延吉へと歩いた。遠くで銃声が響いてくる。まだ戦闘が続いているのだ。まただれかは死ぬだろう。自分たちはいつ銃殺されるのだろうか。一瞬不安が胸をかすめて通り過ぎた。

延吉市へ三日二晩歩き続けて到着した。そこにはすでに数万の日本兵が隔離されていた。便所も炊事場もないテント暮らしだ。夏服に破れた毛布を腹にかけて、土の上にゴロ寝だった。寒さで眠れない日が続いた。

兵士はどの顔も打ちひしがれて、やせて青黒い顔で震えていた。どの顔も黙りこくって話さない、日に何回となく銃声が響く、その都度だれかが銃殺されているのだ。

畑の野菜を盗んだ兵か。逃亡を企てた兵士か。それともソ連兵に反抗した兵士か。犠牲者は、毎日後を絶たないのである。

九月二十六日に、千人単位で混成部隊を再編成して、延吉市を出発した。

目的地はシベリアだ。ソ連兵はヤボンスキー、トーキョウダモイだ（日本兵は東京へ帰るのだ）と捕虜をあざむいて、部隊をだましだましシベリアへと誘導した。

クラシキノの集落へ到着した日は、雪降りて吹雪に変わった。その日の夕方、貨車で極東のコムソモリスク市へ出発した。貨車の中は排せつした汚物や病人と死者の悪臭が立ち込めていた。コムソモリスク市から北方には線路が開通していなかった。

さらに極東のフルムリーまで、夜間にトラック輸送

である。夏服一枚をまとった兵士は夜間輸送に耐えきれず、凍死者が出た。

混成部隊でお互いに顔も名前もわからない、トラップの上で霜に覆われて真つ白くなって凍え、口も聞けない状態だ。凍死した兵の人数などわかるはずもない。

到着した場所は暗く星空だった。目的地は収容所とはいっても形ばかりで、十数戸の廃屋は傾斜して、屋根と玄関は崩れ落ちてなくなっていた。広大な空き地は雑木とカヤ草が繁殖して粉雪に覆われ、荒涼とした極東の流刑地であった。その昔、ロシアの囚人が生活した監獄である。昼飯には小さな馬鈴薯が一個とマッチ箱くらいの黒パンが配給された。

昼過ぎから大隊長（日本軍将校）の命令で廃屋の跡片づけと空き地に生えた雑木の伐採作業であった。捕虜は数人のグループに分かれてたき火で体を温めていて動かない。広大な空き地の至るところで無数のたき火が燃え上がり、空き地は煙で覆われた。ソ連の監督と将校は大声でどなり散らした、カマンド、シトタマリー。（大隊長）これは一体どうしたことだ。

ヤボン、ポチムラボータニエト（日本兵はなぜ仕事をしないのだ。）ソ連人は、大隊長と将校を叱咤し、激怒した。大隊長と将校は捕虜をむちで殴り、足でたき火を踏み消した。「作業にかかれ、作業にかかれと言っているのがわかんのか。」と兵をどなった。

兵は大隊長を横目でにらみ、動こうとしない。たき火を消されると別の場所でたき火を始めるといったぐあいだ。兵は延吉からシベリアまで野宿して歩き続けて、栄養失調で半ば病人だった、空腹で動けないのだ。

夏服の軽装で厳冬には耐えられないのだ。兵が輪になってたき火をしていたとき将校は、働けと言っているのがわからんかどなって、私と数人の兵をむちで殴った。私は頭に手を上げて我が身をかばった。疲労と空腹で足腰が立たないのだ。このときふと「自分は捕虜だ、いつかは殺されるだろう。どうせ殺される身の上なら、ひもじく生き、苦しい毎日を耐えているより、早く殺された方がいい。」と言って、将校を見上げた。

将校はたたくのをやめて、黙って立ち去った。ロシ

ア人は捕虜をトコトンまで酷使して、最後には銃殺するつもりであろうという潜在意識が、私の脳裏にしみ込んでいたのである。

捕虜の待遇や、取り扱い規定の国際条約等の高度の知識は当時の私（二十歳）には微塵もなかった。

二目からはソ連人の監督と将校、日本の将校が一同となって、捕虜に作業を強制した。作業能率の上からない者には食事を減量した。作業拒否者は監獄に入れた。逃亡兵は銃殺した。こうして、魔壇と化した収容所は建設されていった。

昭和二十年九月ころから翌年二月ころまでが犠牲者の多く出た時期だ。このころの犠牲者の多くは氏名不詳者が多い。ソ満国境やシベリアの原野に捨てられて、無縁仏になっているのではないだろうか。

当時は日ソ両軍は互いに言葉が通じなかった。敵対意識が激しく、憎悪し合っていた。日本兵同士でさえ、名前を知らない者が同居していた。私の見てきた死者のすべてが氏名不詳の無縁仏であった。

シベリア抑留体験記

岩手県 菅原 春一

私は、昭和十八年九月十三日に弘前留守部隊に召集され、弘前の営庭において部隊編成され、三興丸という貨物船に乗船いたし、北海道小樽港に上陸し、妙国寺に約一週間ほど滞在し、再度乗船し北方に向かって進んでいきました。我ら兵隊には任務や行き先が全く不明でありました。途中いつ沈没するかわかりません。我ら指揮官中川勇中佐は自ら甲板に登り、いつ敵に攻撃を受け戦死するかわからないから出陣の祝いをせよと言つて、たる酒を全員で頂戴いたしました。途中択捉島に寄港し、さらに北進いたし、着いたところは無捍島という小さい島で、大阪の裏野中佐一個大隊が警備に当たっております。我が部隊は上陸後毎日揚陸作業、道路構築、兵舎建設、陣地構築工事に一生懸命頑張りました。十月一日に上陸し、間もなく雪が降り、